

## メディア教育の歩みと展望：関西大学・総合情報学部最終講義を基にして

その他のタイトル	The Course and Perspectives of Media Education in Japan : Based on My Final Lecture at Kansai University, Faculty of Informatics
著者	水越 敏行
雑誌名	情報研究：関西大学総合情報学部紀要
巻	20
ページ	51-58
発行年	2004-03-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/12247">http://hdl.handle.net/10112/12247</a>

メディア教育の歩みと展望  
— 関西大学・総合情報学部 最終講義を基にして —

水越 敏行

The Course and Perspectives of Media Education in Japan  
— Based on My Final Lecture at Kansai University, Faculty of Informatics —

Toshiyuki MIZUKOSHI

1. During the past half century, audio-visual education and educational broadcasting in Japanese schools have repeatedly undergone radical changes ~ cinema, radio, television, live programs to recorded ones, and so on. The utilization rate of educational television (ETV) increased from 1959 (10%) to 1970 (90%). According to these changes, theories and strategies of ETV utilization in school education have been rapidly shifted, and remodeled.
2. New technology has been introduced to Japanese schools from 1975~85; especially, the computer. We had no previous experience with such kind of rapid, qualitatively different changes from the calculator, word-processor, spread sheet, information retrieval, multi-media, network utilization and so on. They have quite different kinds of functions, but they have been piled up continuously.
3. What can we learn from the history of media education, and how can we create new digital media utilization and media-literacy education? These are our new tasks.

## 1. Audio-Visual Educationとは？

このAudio-Visual Educationという言葉は第二次世界大戦中に、米軍の対日上陸作戦などでも、開発され、活用されてきた。敗戦後の日本にもいち早く導入された。「視聴覚教育」の訳語がついた。そのまま和訳すれば、「聴視覚教育」になるはずだが、なぜ逆転させて『視聴覚』としたのであろうか？この疑問を私は学生時代からずっと持ち続けてきた。この訳語を当てた有光成徳と懇意に成り、教えていただいたのは、1980年代中頃になってからであった。

Audio=ラジオであることは、容易に分かるが、問題はVisualが、映画なのか、テレビなのか、それとも写真などの静止画も含むのかという点である。有光によれば、映画を意識していた。テレビジョンはまだ日本の学校教育には、登場していなかった。すでに戦前から、映画を使った映像教育は始まっており、進駐軍なども盛んに持ち込んで紹介した。真空管ラジオによる教育よりも、より具体的な経験を提供できる、というような思いを込めて、意図的に逆転して翻訳したのだという。

その後は、ご案内のようにテレビジョンが開発され、放送教育でも花形に躍り出たので、ラジオと併用はしても、この「視聴覚」教育という訳語は、抵抗なく定着していったのである。

## 2. NHK学校放送の発足

ラジオからテレビへの切り替えは、急速に各地で進められた。テレビの本放送開始と同じ昭和28(1953)年に、15分間の教育番組を毎週流していたことは、注目したい。

さらに昭和34(1959)年、東京と大阪で、NHK教育テレビが開局した。その当時、ラジオとテレビの両方を利用できる環境にあった学校では、ラジオからテレビ利用の放送教育に、急速に切り替わっていった事実は、注目されてよい。

以上の経過から、私は次の点に、注目してみたい。

一つは、テレビジョンの発足当初から、教育放送が組み込まれていたこと、さらに一般番組と

◆ ◆ ◆ 1. Audio-Visual Education

- なぜ「聴視覚」でなくて「視聴覚」教育か？
- Audio=Radio
- Visual?
- Television or Cinema-

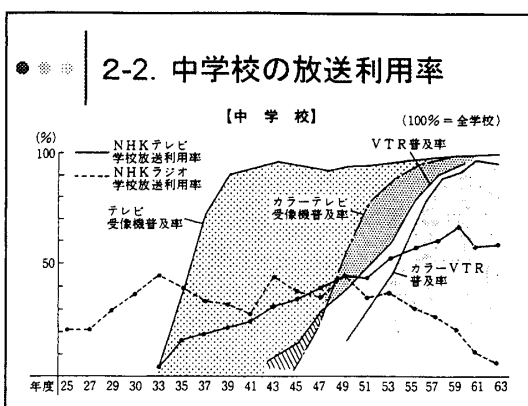
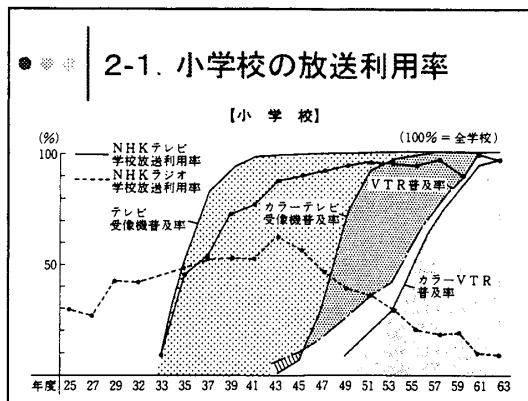
◆ ◆ ◆ 2. NHK学校放送の発足

- ラジオからテレビジョンへの切り替え  
(しかもラジオも生き残る。強い分野に特定して)
- 一般番組と教育番組との二本立ての英断。
- 白黒からカラーテレビへの切り替え。  
(幼児・低学年から)  
(理科番組から)

教育番組との2局体制が、早い時期からとられたこと。世界各国の放送教育を見渡しても、このような構想を持って、スタートさせた国は、稀有の例である。

一方ラジオでの学校放送は、その後も継続されていくが、ラジオという聴覚だけのメディアを持つ強み、例えば音楽教室、音楽の旅、ラジオ図書館、英語教室、青年期の探求などの分野で、新しい道を切り開いていった。これはメディアの交代期に見られる特徴とも言える。

さらにテレビジョンそれ自体が、白黒からカラーに順次切り替えられていく。高度経済成長、皇太子のご成婚、東京オリンピックと重なるこの1960年代は、テレビの台数も倍増を続けると共に、カラー放送が始まり、それが幼児向け、小学校低学年向けから、次第に上の学年へ、教科では理科番組から、カラー放送に切り替わっていくのである。その爆発的な普及と利用率の向上は、他のメディアには近代学校の120年でも、比類がない。(図2-1, 図2-2を参照)



### 3. VTRの出現が放送教育を変えた

オープンリール方式ではあったが、簡易VTRが学校現場に普及しだしたことは、放送教育に質変化をもたらした。「生(番組), 丸ごと, 継続利用」と言うのが、放送教育の原則とされ、教師もまた生徒と同じに、生番組を視聴し、そこからの発展的な学習を展開していくことを強調する立場が主流とみなされてきた。

ところがビデオを利用するとなれば、この三原則は、崩れていく。教師の主体性がより強く発揮

されるようになる。それはまた、中学校、高校、あるいは特殊教育学校などでの放送利用を急伸させることにもなった(図2-1, 図2-2を参照)。教科担任制であるがために、放送番組に合わせて、教科の時間割や活動を柔軟に変更していけるような小学校、幼稚園・保育所とは、同列に語ることは出来なかった。録画-再生利用だけでなく、一部分だけの利用、繰り返し視聴、

● ● ● 3. VTRの出現が放送教育を変えた

- 中学校・高校・特殊教育学校で利用が急増。
- 「生～丸ごと～継続」の放送教育3原則が崩れた。
- 録画・分断・リピート・反復利用の出現。
- 番組制作もフィルムからビデオテープに。生放送から録画(編集)放送へ。

消音利用など、新しい利用法が開発され、普及していったのも、これらの校種であった。

一方また送り手側も、生放送から録画・録音に、フィルムからビデオテープに切り替えていく。番組の編成、収録、編集の仕方などが、決定的に変化・向上してきた。

#### 4. 放送番組の質変化

既に述べてきたが、カラー化とビデオ録画の普及は、番組編成にも大きく影響してきた。学年別、教科別の番組編成、例えば理科教室とか、小学校5年生というような「たて・横の特定」が、一般化してきた。月曜日から土曜日まで、朝から夕方までというような大きな升目の番組構成表が、各校種別に作成されていった。

しかし教科中心の番組に加えて、総合的学習に類する番組（後述する環境教育番組など）、特別

シリーズ番組(中学校)、高等学校講座など、通年の番組でないシリーズ番組が、登場してくる。この頃(1980年代)がわが国の放送教育が、最も普及発展した時期であろう。しかし既に中等教育には陰りが見えてきており、その後の急激な衰退の兆しは、見え始めてもいる。特別シリーズの番組を組み、それを初級と上級に分けて、中学と高校向けに、昼休み時間に放送したことは、この急衰退の直接原因ともなった。

他方では「みどりの地球」(1975年、NHK名古屋)が、わが国では最初の環境教育番組で、例えば公園に咲くツツジの花や葉に、白い点々がつく。これは酸性の雨が降った証である、というような身近な環境問題を投げかけてきた。ただこの番組の利用率は、最低の数字が続き、ついに10年後の1985年で、打ち切りとなった。わが国の環境教育番組の先駆けが、惨めな数字しか残せなかった理由は、ただ一つ。番組の質ではなくて、小学校高学年から中学生を対象を絞ったこの番組を「利用できる時間帯」、これが確保できなかったということである。環境教育の重要性を教師も自覚しており、NHKもそのために小学校高学年から、中学生にかけての環境教育番組を作成したわけであるが、理科、社会科、あるいは道徳の時間を犠牲にして、この番組の視聴に向かう教師の数は、多くは望めなかった。視聴率の史上最低が10年も続いた理由は、ここにある。

その後に「学校自由裁量の時間」、そして今では総合的学習の時間が、年間に100時間を越えて利用できる時代になってきた。1985年に番組を中断せずに、もう数年継続しておれば、日本の学校放送では、昭和50(1975)年以来、環境教育番組の制作と実践活用をしてきている、と世界に向けて宣言できたのであるが、

#### 4. 放送番組の質変化

- 学年(縦)と教科(横)を特定した番組編成。(小学校5年生=理科教室)
- 中学や高校には「特別シリーズ番組」も。
- 英語や他の外国語は教育番組と別枠で。
- 総合的学習の番組も登場。
  - \* 環境教育(みどりの地球～)
  - \* 国際理解教育(地球たべもの大百科)
  - \* 教科横断(こめ、川)

## 5. 放送の生き残りをかけて

放送 (broadcast) は、広く播くメディアと言える。中央の放送局から津々浦々にかけて、一方向の情報を伝播するという本来の機能だけで、生き残れる時代ではなくなってきた。ネットワーク社会が地球規模で広がり、情報の受け手と送り手とが、いつでも入れ替わり、「平行実存 (parallel-reality)」できるような社会が現実に到来している。(石井威望, 産経新聞, 2003年7月18日)

地上波デジタルとBS (放送衛星), それにCS (通信衛星) という組み合わせができたり, デジタル放送と無線ネットに第三代携帯電話という1台3役の融合端末が, NTT, NHK, 大手の民放などで開発されても, 双方向性の映像情報の送受が, いつでも, どこでも, 誰にでも出来るわけには行かない。まだ現行のCATVの方が, 利用の利便性, 多様性, それに費用面で, 優れているとも言えよう。Broad-castingとNarrow-casting; 一方向性と双方向性は, それほど単純に両極概念では, 整理がつかないであろう。

さらに赤道上の通信衛星の下にあるアジア諸国では, 世界中の番組が直接降り注いでくるために, 自国の放送番組の視聴率が激減し, やむなく公共放送でもローカル番組を主にせざるを得ない実態が, 出てきている。(シンガポール, マレーシア, スリランカ, インドなど, 英語が普及した南アジアでは, 殊更に)。

## 6. CD-ROMと動画クリップ

コンピュータの普及と質変化, これについては後述するが, デジタル化の進展で, これまでの別々のメディアが, 統合されていく中で, 放送や視聴覚教育にも, 革命的な変化の波が押し寄せてきた。ここではいくつかの事例に限定して紹介してみる。

\* 「文京文学館」1989年, 中野照海ら国際基督教大学の現役・OBの研究者を中心にして, 開発されたCD-ROM教材である。文京区ゆかりの文人

たちが, あたかも一堂に同居しているような仮想の文学館をデジタル画面上に構成し, 文人の書斎, 執筆中の原稿, 渡り廊下などを個人の好みで, 訪問できるように構成してある。

\* 「人と森林」1990年, NHKが開発。森林のもたらす光合成や, 森林浴効果などの動画, 足尾

### 5. 放送は一方向・広播性だけでは生き残れない時代に

- 「テレビの消える日」(George Gilder, 訳1993)
- デジタル放送とコンピュータの連携 (広播性と双方向性の組み合わせは, 可能か?)
- ケーブルテレビでインターネットサービス。(CATV)
- 衛星放送・多チャンネル化で地上波TVはどうなるのか? 特にアジアの途上国は?

### 6. CD-ROM、動画クリップの登場

- 「文京文学館」1989年, 中野照海らが開発。
- 「人と森林」1990年, NHKが開発。
- 「おこめ」2001年, NHKで動画クリップ付。
- Vannevar Bush; As we may think.-memex (1945)の夢がかなう。
- 一斉視聴から個別化・個性化視聴への道が。

銅山の公害とその回復への手立て、焼畑農業がもたらす森林破壊、などのクリップを収めて、好みの静止画をクリックして、学びを深めていく仕組み。これは大阪大学人間科学部の教育技術学研究室が、金沢市内の小学校などで、実証研究を続けてきた。

\* 「たったひとつの地球」1998年、NHKが高学年向けに放送開始。これはインターネット対応を当初から予定しており、「インターネット・コーナー」を特設し、番組ホームページの紹介、番組に関連するイベントやアンケートの紹介、さまざまな学校での番組とインターネット利用の様子をモデルとして紹介した。利用した学校は、専用のWebページを立ち上げ、掲示板への書き込み、テレビ会議システム利用の交流学習などにつなげていく。当時、金沢大学の黒上晴夫助教授(現在は関西大学教授)らのグループが、この「インターネットスクール」の立ち上げ、交流を支援した。

\* 「おこめ」など、その後のNHK学校放送で、総合的学習を支援する番組が、開発され、現在も継続して展開されている。いずれも上記した一連の交流学習、動画の一斉視聴と静止画の選択利用、実体験学習などの可能性を結び付けようとするものである。関西大学大学院・総合情報学研究科の大学院生が、交流学習の仲介と支援をしてきた。

## 7. コンピュータの教育利用の激変

学校に登場した教材・教具の中で、コンピュータほど、劇的な変化と発展を見せたメディアは、他に類を見ない。先に見てきたテレビジョンでも、白黒からカラーに、アナログからデジタルに、CATVや放送衛星利用(CS)に、録画機もオープンリールからカセットに、さらにDVDに、というような激しい変化と発展は遂げてきた。しかしコンピュータの場合は、利用の目的そのものが、全く異質なものに变化していくこと。しかも

### 7. コンピュータの教育利用の激変

- 電子計算機(弾道計算～データ処理計算)。
- CAI・CMIで個別教育と評価、成績管理。
- ツール学習(表計算、集計、検索、ワープロ)。
- コンピュータネットワーク(電子メール、HP.等)。
- 新メディア(マルチメディア・双方向性のメディア)。
- これらの変化が半世紀たらずで。しかも前のものを下積みにして、その上に。

以前の機能を棄てるのではなくて、その中に組み込んだり、下敷きにしながら、異質なものへと変化・発展していく。その意味では、他に比較できるものが、見当たらないといえる。

- (1) 電子計算機として。大砲やミサイルなどの弾道計算から始まり、気象予測、そしてデータ処理に。
- (2) CAIとかCMIで、個別学習の支援として。また出席や成績処理、特に相対評価など。
- (3) ツール学習(表計算、集計、情報検索、ワードプロセッサ、など)に。
- (4) コンピュータネットワークとして。電子メール、ホームページ、掲示板、交流学習などの双方向学習。
- (5) ニューメディアとして。多メディアの統合体としてのマルチメディア、個人が選べる動

画・静止画(クリップなど)。

なお坂村 健は、弾道計算のような軍事目的利用、気象予測などの数値計算、ワープロに代表される記号処理、マルチメディアとしての活用、情報を加工し再構成しての発信などを半世紀の開発・発展の歴史を振り返りつつ、まとめている。

さて問題は、こうした急激な変化がわずかに半世紀で起こり、前のものを内包しながら、絶えず新しい機能を表面に出してくる。教育界では、CAIやCMIに打ち込んで、コンピュータ利用をしてきた教師は、ワープロとして、あるいは電子メールや交流の手段が主になる使い方には、心を開けられない者も少なくない。算数の個別学習用のドリルソフトを、夏休みかけて開発したような経験のある教師には、コミュニケーションの媒体、増幅器としてのそれには、どうしてもなじめない者が、なお現存する。

その点、放送メディアにはそうした異質性と非連続性は見られない。しかし教育のメディアとしては、単独では衰退の一途をたどるしかないであろう。地上波デジタル放送の普及は、学校でも家庭でも、いつでもどこでも放送が視聴できるだけでなく、コンピュータでノンリニア編集をしたり、マルチメディアの一つとして組み込んだ利用も容易に出来るようになる事を意味する。e-Learningの教材の中の一つに数えることも出来るようになるだろう。例えば小学校高学年向けに現在放送されている「おこめ」(総合的学習)とか「にんげん日本史」(社会科)などは、15分の番組と、いくつかの動画クリップで構成されていることは、前記した。このセットは、異なる機能というか、目的をもっており、それがワンセットになっている。15分番組はクラス全員が一斉視聴し、動画クリップでは、個々の児童の興味関心に応じた発展学習を意図している。それとメールや掲示板などでの交流学习で、つながりをつけていく。こういう何重かの映像の利用とICT教育とのリンクが、一つの生きる道と思われる。

しかしながら「一方向性・広播性」という放送本来の機能が、各国の衛星放送が競い合う今日では、その重要性を更に増してきていることも事実である。年間に20本の番組を前もって企画し、制作しておいて、順番に定時番組として放送していく現在の学校放送のシステムそのものが、見直される時でもあろう。「週間子どもニュース」のような(オーストラリアでは、Behind the News)ニュースの速報性と、背景の解説とを兼ねたような番組が、候補の一つであろう。BSニュースを日本語通訳なしで、生放送する企画も考える時期であろう。生きた外国語を学ぶのにこれ以上の教材はなかりう。

(注) この論文は、関西大学総合情報学部で、平成15年1月に行った水越の最終講義を基にして、加筆したものである。

#### 参考文献

- [1] 全放連・日本放送教育学会(編)『放送教育50年 ―その歩みと展望―』(日本放送教育協会, 1986)



- 〔2〕 中野照海著『教育メディアとともに』（日本放送教育協会，2002）
- 〔3〕 水越敏行・ICTE編著『メディアとコミュニケーションの教育』（日本文教出版，2002）
- 〔4〕 NHK放送文化研究所・監修『放送の20世紀』（NHK出版，2002）
- 〔5〕 水越敏行編著『「おこめ」で広がる総合的学習』NHKデジタル教材の活用，（明治図書，2002年）
- 〔6〕 坂村 健著『コンピュータはどこへ』（岩波書店，1998）
- 〔7〕 Bikkar S. Randhawa / William E. Coffman (eds.) *Visual Learning, Thinking, and Communication*. (Academic Press, 1978)